「真実を受け入れる強さ」学ぶ

青少年読書感想文全国コンクールで県最優秀賞

石井　絢子さん　15歳
荒砥中

第58回青少年読書感想文全国コンクール中学生の部・課題図書で、作品「受け入れる強さ」が県最優秀賞に選ばれ、中央審査会へ送られた。

「県で最優秀賞になったと先生から伝えられたときは、全く信じられない気持ちでした。でも、友人から『おめでとう』と声を掛けられたり、家族から『よかったね』と祝福されたりして、うれしさが沸いてきましたね」

課題図書2冊の中から選んだ『怪物はささやく』は、英国作家の作品。ホラー小説ではなく、重病を患い死を目前にした母親と13歳の息子との物語で、少年の成長を描いている。

「少年コナーは母の死という現実が訪れることを受け入れられず悩み、何度も何度も悪夢に襲われます。読んでいると映像が頭に浮かび、読みやすい本でした。自分だったらどうするだろうと真剣に考えながら、感想文は3日間かかって書き上げ、推敲して仕上げたんです」

荒砥中三年生。一学期までは美術部長を務めていたが、今は高校の受験勉強に忙しい毎日を送っている。

「学習塾の冬期講習に通い、家でも長い時間勉強しているので、受験のことばかり。入試が終わったら、友達とどこかへ遊びに行ったり、好きな絵を描いたりしたいな」

高校卒業後は進学志望。心理学などを学んでみたいと考えている。寒い冬が過ぎれば春の訪れ。今、力を蓄えることで夢が花開く日もきっと訪れるだろう。

未来への贈りもの

本市収蔵作品

川隅路之助『春遠からじ』昭和52年

油彩・カンバス（91センチメートル×72・7センチメートル）

窓辺に飾られたサザンカの花。周りには広葉樹の枯れ葉と果実が並べられ、窓の外には葉を落とした木々の下を、犬を連れて散歩する人の姿が描かれています。洋画家・川隅路之助さん（明治39年～平成5年）は、寒気に耐えて凛と咲くサザンカを可憐で美しいと言い、特に晩秋から冬の季節を好んで描きました。

川隅さんは、堀川町（現本町一丁目）に8人兄弟の末っ子として生まれました。大正15年、前橋商業学校（現前商高）を卒業後、上京して出版社に勤務。環境の変化から胃を痛め、「好きな絵を描けば苦痛から逃れられると思った」と絵画を始めたきっかけについて回想しています。

本郷絵画研究所では硲伊之助と辻永に師事。その後、木村荘八や岡鹿之助の教えを受け、活動の場を春陽会へと移します。昭和18年に春陽会展に初入選。以後同展に出品を続けました。空襲が激しくなった昭和20年に前橋へ帰郷。その後も春陽会展へ出品し、昭和22年に春陽会賞を受賞しました。

群馬美術協会を退会して、昭和26年に群馬美術家連盟を結成。生涯にわたり代表を務めました。

窓のある風景は、川隅さんの主要なモチーフです。初期では窓辺の静物と背景の対比という構図でしたが、次第に人物や動物、室内の様子が細かく描かれるようになります。本作品の背景で散歩しているのは愛犬です。

モチーフに対しての愛情が、穏やかな色彩で情感豊かに描かれています。

問い合わせは　文化国際課　☎898－5825

クローズアップ
CLOSE-UP

本市で「ニューイヤー駅伝」

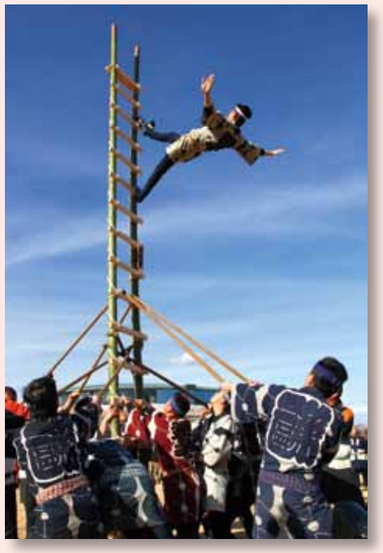
新春恒例のニューイヤー駅伝が、1月1日、本市を発着点に行われました。大会を制したコニカミノルタは5年ぶり7度目の優勝です。ゴールテープを持って迎えたのは、昨年12月に駅伝大会で全国優勝を飾った富士見中駅伝部女子選手。大役を果たしていました。

中央公民館で小学生書き初め

1月4日に中央公民館で、新春中公書き初め塾を行いました。60人の小学生が講師の指導を受けながら書き初めに挑戦。手本を参考にして半紙に向かう子どもたちの顔はみんな真剣そのものです。毛筆に墨をたっぷり含ませて、黒々と元気に書いていました。

電車の魅力がぎっしり

1月3日、上毛電鉄新春イベントが大胡駅で開催されました。デハ101の臨時運行など、上電と触れ合えるイベントが盛りだくさん。電車と綱引きには100人が参加し、力を合わせて綱を引きました。電車がゆっくりと動き出すと大歓声が沸き起こりました。



伝統の妙技を次々と披露

前橋公園で1月6日、消防隊出初め式を開催しました。消防隊員の団結と士気の向上を図るために行うもので、姿勢服装点検などを実施。伝統のはしごのりでは、繰り出される数々の技に、大勢の観客が感嘆の声を上げていました。